

## 初期の比較音楽学における録音技術と音楽認識の関係

秋吉康晴

本論文は 1900 年代から 1920 年代におけるアメリカおよびドイツの非西洋音楽の研究を中心に、録音技術と記譜法との関係を考察し、技術に媒介されることで生じた音楽認識の変化を明らかにすることにある。

本稿はまず比較音楽学における蓄音機の特異な位置づけについて検討する。初期の比較音楽学において、録音技術は五線譜に代わる新たな記譜法として位置づけられ、非西洋音楽を理解する上で重要な役割を果たしていた。このことは伝統的な五線譜と音楽の結びつきを反省し、音楽そのものを認識しようとする新たな態度をもたらしていたと思われる。さらに、本稿ではそうした録音技術の影響によって作られた記譜法について考察し、それらの記譜法から新たに形成された音楽認識のあり方を読みとることを試みる。

これらの手続きによって、初期の比較音楽学は録音技術によって記譜法を修正しながら、非連続的な音符の関係から、連続的で微細な周波数の変化へと分析の観点を変えていったことが明らかとなった。録音技術は音楽の微細な差異に気づかせ、五線譜とは異質な音楽認識のあり方を形成していたのである。こうした比較音楽学の諸側面から、本稿は録音技術が認識のあり方とは無関係な単なる記録の一手段ではなく、認識の仕方そのものを反省する上で重要な可能性をもっていたことを示す。